妻有新聞　月額購読料1050円(税込)　週とおかまち報 1979年創刊

「つかうアート」を提言

松高でシンポジウム

青山学院・苅宿教授や北川氏が議論

学びのための「つかうアート」を提唱―。5年前から大地の芸術祭の縁を通し、青山学院大・苅宿俊文教授がコミュニケーション講座を継続している十日町高松之山分校で9日、「アートってこんな『使い方』があるんだ！を考えるシンポジウム」が開催。苅宿教授、同祭総合ディレクターの北川フラム氏、さらに文科省教育課程調査官の岡田京子氏、大東文化大准教授・上野正道氏でパネルディスカッション。このなかで苅宿教授は自身で表現する『するアート』と観賞する『みるアート』に加え、アートを手段としてコミュニティづくりや異文化交流促進に活用する『つかうアート』を提言した。

苅宿教授は先月24日、同校と芸術祭期間中に松代で農業体験していた香港・寶學中との異文化交流授業を監修。言葉が伝わらないなか、ジェスチャーゲームなどで関係を深めた。これも『つかうアート』のひとつ。苅宿教授は「アートは他者との序列はつけられないもの。そして、自分が当たり前と思っているものが違う、と知るのが大きな学び。つかうアートとは、作るプロセスや自分の振り返りを通し、他人との関わり方を学ぶコミュニケーション」などと生涯学習としても活用できる側面を強調した。

一方、パネリストで参加の北川氏は「平日に芸術祭の受付をしているのは外の人。そういう意味でまだ我々は排他的。これを何とか直さないといけない」と指摘。世界から多彩な人々が参加する芸術祭を「越後妻有なら何かができると思って来る。歴史的に豪雪地で生活は苦しいがすべての人を受入れて来たこの地。奥の所では開かれている」などと話した。

苅宿俊文教授（左）や北川フラム氏（手前）がアートの可能性を語った（9日）

夏に百人一首を

万葉の会　児童から高齢者まで

○…「百人一首～夏の巻」が6日、サンクロス十日町で行われ、児童から高齢者まで6組30人が参加。読み手が札を読みあげると真剣な表情で札を取り合った。会場には「はいっ」の声が響き、札が少なくなると勝負が白熱していった。時には札の取り合いが同時で、ジャンケンで勝負を決める場面も見られた。

○…百人一首・万葉の会の井口カズ子会長は「毎年2月に百人一首